

農作物技術情報 第4号 花き

発行日 令和8年6月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 共通 大雨に備えて排水対策を行いましょう。
- ◆ りんどう 病害虫防除を徹底しまししょう（特に褐斑病、黒斑病、ハダニ類、リンドウホソハマキ）。
事前に切り前を確認し適期に収穫しまししょう。
- ◆ 小ぎく 病害虫防除を徹底しまししょう（特に白さび病、オオタバコガ）。
収穫前に伏せ込み用の親株を選抜しまししょう。

りんどう

1 生育概況

露地栽培の生育は、平年並みからやや早くなっています。極早生品種の開花が始まっています。早生品種は側芽発生期を過ぎ、着蕾期となっています。

病害虫は、ハダニ類の発生が増えています。また、葉枯病、黒斑病、リンドウホソハマキ、アザミウマ類の発生がみられています。

2 ほ場管理

(1) 新植ほ場の管理

新植ほ場の乾燥は、苗の生育に大きく影響します。晴天が続く場合は、苗がしおれる前に通路かん水を行います。

新植苗は、葉枯病やリンドウホソハマキ等の病害虫の影響を強く受けるため、多発した場合には翌年の株落ちの原因となります。採花ほ場と同様に定期的な薬剤散布を行い、病害虫防除を徹底します。

(2) ネット上げ

フラワーネットの最上段が草丈の7割程度の位置となるよう草丈の伸長に合わせて調整し、茎の曲がりの発生を防ぎます。

フラワーネットが緩んでいる場合は、支柱の打ち直しや打ち足し、ネットサイドのロープ補強、横木の設置や追加を行います（写真1）。

(3) 排水対策

大雨に備え、水路などからの流入水を防ぐため、畦畔の補強、水路の泥やごみの除去を行います。

ほ場が滞水した場合は、排水路に水が流れやすくなるよう溝切りをして速やかに排水します。



写真1 ネット等設置事例
(周囲に排水のために設置した溝あり)

(4) 高温対策

花芽発達中に高温や強日照に遭遇すると、花卉の着色異常（日焼け花）や開花遅延が発生しやすくなります。梅雨明け以降に開花する品種には、開花の約1か月前から遮光資材（遮光率30～40%）を設置し、日焼け症状の軽減を図ります（写真2、3）。



写真2 遮光資材の設置例



写真3 日焼け花の症状

(5) 残花処理

収穫後の残花は、アザミウマ類、オオタバコガ等の害虫の増殖源となります。収穫が終わった品種は、花蕾の着いている部分の茎を折り取り（花茎除去）、ほ場外で処分します。

3 収穫、出荷調製

(1) 収穫

次年度の株養成のため、株当たり3本程度の茎を残して収穫します。ただし、草丈が伸長しやすいほ場で切り下株の高さを50cm確保できる場合、すべての茎を収穫し、出荷量を増やします。

切り前（収穫に適した開花状態）を各地域の目揃会等で事前に確認し、適切な切り前で出荷します。

ウイルス病の汁液による感染を防ぐため、刃物を使わずに手で折り取ります。

収穫作業はできるだけ高温時を避けますが、やむを得ず高温時に収穫する場合は、速やかに日陰へ運ぶとともに、できるだけ早く水揚げを行います。

雨天時の収穫や朝露で濡れている場合は、扇風機や専用の切花乾燥機を使って乾燥させます。水を切るために切花を振ると、花の蜜が花卉や葉などに付着し品質低下の原因となるので行わないようにします。

(2) 出荷調製

出荷規格は、各地域の目揃会等で事前に確認します。

暗い場所での選別作業は、病虫害被害の見落としや眼の疲労を助長しますので、作業場全体と作業台の明るさを確保します。

水揚げは十分な時間（3～4時間以上を目安）を確保しますが、逆に長すぎると輸送中の蒸れの原因となるので注意します。

水揚げ用の水は飲用可能なものとし、毎日交換します。また、水揚げ容器もこまめに洗浄し、内側にぬめりが付かないようにします。

箱詰めは、各部会等で決められた方法で行います。輸送中に花束が動いて傷むことがないように確実に固定します。

4 病虫害防除

(1) 褐斑病

重点防除時期となっています。発生後の防除は困難なので、発生前から7月下旬まで予防効果の高い薬剤を継続散布することで防除します。特に前年に発生したほ場では、今年も発生しますので防除を徹底します(写真4)。

併せて、適切な株仕立て、ひこばえ及び茎下部から発生する側枝の除去によって通風を良くすることが有効です。



写真4 リンドウ褐斑病

(2) 黒斑病

各地域で発生が始まっています。例年、入梅期(6月下旬)にフラワーネットにより生じた葉の傷口等から感染します(写真5)。初期の発生を抑えるため入梅期に効果の高い薬剤を予防散布します。また定期的な薬剤散布で発生を予防します。

平均気温20℃以上の連続降雨日に感染しますので、薬剤散布する場合は、週間天気予報を参考にして降雨前に散布するようにします。



写真5 リンドウ黒斑病

(3) 葉枯病

各地域で発生が確認されています。今後、降雨が続くと発生が増加します。定期的な薬剤散布による予防防除が基本となります。また、ひこばえやこぼれ種からの芽生えの除去が耕種的防除として有効です。

(4) ハダニ類

各地域で発生が増えています。上位葉まで発生しているほ場もみられています。ほ場をよく観察し、発生初期の薬剤防除に留意します。肉眼での確認が難しい場合は、ルーペ等を使用するか指導機関に相談します。

薬剤散布は葉裏にきちんと薬液が付着するよう丁寧に行います。同系統のダニ剤は年1回の使用を基本とし、薬剤抵抗性の発現を回避します。また、増殖場所となりやすい周辺雑草の除草も重要です。

(5) リンドウホソハマキ

生長部や茎への食害がみられています。茎内に侵入した幼虫は薬剤防除が難しいので、被害茎は見つけ次第長めに折り取り、必ずほ場外で処分します。また、被害が多くみられたほ場では、7月以降も薬剤防除を継続します。



写真6 リンドウホソハマキの茎への幼虫潜入痕



写真7 リンドウホソハマキの食害(食害部より上が枯死)

(6) オオタバコガ

各地域のフェロモントラップ調査では、誘殺数が増加しています。例年、着蕾期以降に被害が多くなりますので、今後も注意が必要です。生長点付近の茎葉や花蕾に産卵し、幼虫が花蕾内部に侵入し加害しますので、**開花が始まるほ場では防除を開始**します（写真8、9）。

また、花蕾内部に侵入した幼虫は薬剤防除が難しく、収穫が終わったほ場に花蕾を残すと次世代の発生源となりますので、花蕾の着いている部分の茎を折り取りほ場外で処分します。



写真8 オオタバコガの産卵



写真9 オオタバコガの食害

(7) アザミウマ類

花蕾の着色期以降に蕾の内部へ侵入し加害します。開花が始まった極早生品種から発生しています。花卉展開前の蕾内部にいるアザミウマ類には防除効果が得られにくいため、侵入前にはほ場周辺の増殖場所を作らないことが防除のポイントです。まず、クローバーなど開花している周辺雑草をできるだけ減らします。次に、収穫し終えたりんどうの残花を残さないよう、着花している茎の部分折り取り、ほ場外で処分します。

なお、アザミウマ類防除を目的とした薬剤散布は、花卉が展開している時間帯に行われることが多いですが、高温時の散布は薬害に注意します。

小ぎく

1 生育概況

8月咲き品種は、概ね平年並みの生育となっており、整枝作業が行われています。9月咲き品種は、5月下旬から定植となり、概ね順調な生育となっています。

病害虫は、白さび病、アザミウマ類、アブラムシ類、オオタバコガ、ハダニ類等の発生がみられています。

2 ほ場管理

(1) 排水対策

小ぎくは湿害に極めて弱く、長時間の滞水はその後の生育に大きく影響します（写真10）。普段から降雨の際に水がたまりやすい場所では、溝切り等により排水を促します。

(2) かん水

小ぎくは根張りが浅く、乾燥の影響も受けやすいため、晴天が続いてほ場が乾燥した場合は、萎れる前にかん水します。



写真10 排水不良地で発生した欠株
(写真手前中央部ほど水が溜まりやすく被害程度が大きい)

(3) 整枝

側枝の長さが 20～30cm の頃に、生育の揃った側枝を株当たり 3 本残し他の側枝を除去します。目立って生育の良い側枝を残してしまうと、他の 2 本の生育が劣る傾向にありますので、全体のバランスを考えて残す側枝を決めます。

(4) 下葉取り

蕾が見える頃になったら、地際から 20cm 程度までの葉を落として通風を良くします。着蕾前でも、早期に下葉が黄化・褐変した場合は早めに除去します。

(5) 出荷規格

出荷規格は各地域の目揃会等で事前に確認します。

(6) 病害株の抜き取り

わい化病に感染した株は、薬剤散布による治療ができないため、見つけ次第株を掘り上げて処分します（写真 11）。感染株を親株にすると挿し穂に伝染するため、年々発生が拡大します。わい化病は症状にいくつか特徴がありますが、判断できない場合は指導機関に相談します。



写真 11 キクわい化病

【主な症状】

- ・草丈が短い
- ・葉が小さい
- ・節間が詰まっている
- ・早期に開花する傾向がある
- ・品種によって症状の程度に差がある

3 病害虫防除

(1) 白さび病

降雨が多くなると発生が増加します。気温 15～23℃、湿度 90%以上の多湿条件で感染しやすくなりますので、降雨前の薬剤散布で予防に努めます。

発病後は病気にかかった葉を除去し、ほ場外に持ち出して処分します。その後、治療効果が高い薬剤を散布します。予防剤と治療剤を確認し、状況に応じて適切な薬剤を選択することが重要です。

(2) アザミウマ類

アザミウマ類は、葉や花の吸汁による直接的な加害のほか、キクえそ病（TSWV による）などのウイルス病を媒介しますので、定期的な薬剤防除を行います。併せて、ほ場内外の除草も徹底します。

(3) オオタバコガ

各地域のフェロモントラップ調査では、誘殺数が増加しています。また、一部のほ場で、食害が認められています。

生長点付近の茎葉や花蕾に産卵し、幼虫が新芽や花蕾を好んで食害します（写真 12）。着蕾が始まる前から防除を開始します。また、発見が遅れると出荷に大きく影響します。ほ場をよく観察し、早期発見に努め、食害がみられたら直ちに防除します。



写真 12 オオタバコガの食害

4 親株の選抜

翌年の採穂に使用する親株は、収穫後では形質や病害の確認が難しくなります。特に、わい化病は低温では病徴が分かりにくくなるため、伏せ込み時では確認が困難です。このため、収穫が始まる前に、以下の点に留意して親株を選抜し、目印を付けておきます。

【選抜のポイント】

- ① 草丈の伸長が良好
- ② 草姿が優れる
- ③ 品種本来の花色を有する
- ④ 開花期が目的の時期に合う
- ⑤ 病害虫（特に白さび病、べと病、わい化病、キクヒメタマバエ）がみられない
- ⑥ 株が充実しており発生している茎の数が多い

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyoushizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は7月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 農薬散布時は、近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬は適切に保管・管理しましょう